

ピーター・ウォーリー 著
永井玲衣 小川泰治 古賀裕也
後藤美乃理 田中理紗
得居千照 西山溪 堀越耀介 訳

『もし友だちがロボットだったら？——哲学する教室のつくりかた 30 の授業プラン』

晶文社、2023 年
368 頁、2,400 円（税別）

本書は、Worley, Peter(2019). *The If Machine: 30 Lesson Plans for Teaching Philosophy* (2nd ed.), Bloomsbury Education. の訳書である。著者のピーター・ウォーリーは The Philosophy Foundation（イギリスを拠点としさまざまな年齢層の人々を対象とした哲学的探究の普及に努める慈善団体）の共同設立者で共同 CEO であるとともに、自身も豊富な実践歴をもつ哲学プラクティショナーである。本書にはそんなウォーリーの経験にもとづき、教室で子どもたちと哲学の授業をするための方法論および 30 の題材がおさめられている。原著の第一版は 2011 年に出版され、それ以降多くの教師に愛用されるなどベストセラーとなった。映画『ぼくたちの哲学教室』（2023, 原題 Young Plato）でもケビン校長が同書を片手に教室に入り、子どもたちと哲学対話を行うシーンが印象的である。

第 1 部「理論編」では本書のタイトルにも含まれている“If”（＝「もし～だったら？」）が「仮説

を立てる思考法」としてフォーカスされ、哲学をするうえでの重要性が説明されている。「事実に基づいて仮説が正しいかどうかを確かめることが科学だとすれば、哲学は概念的に仮説が正しいかどうかを確かめます」（p. 29）。すなわち、「もし～だったら？」と子どもたちに問うことは、対話のなかでしばしば子どもたちが固執しがちな事実についての議論（自分の脳と他人の脳を交換できるかどうか）に縛られることなく、概念についての検討（もし自分の脳と他人の脳を交換したとしたらそのとき自分はどこにいる？）に焦点を絞ることを可能にするという。理論編では続いて、哲学的な探究の進め方やファシリテーターの Tips「先生のワザ」が紹介されている。日本の読者にとっても共感するところの多い進行上苦勞する場面（教室全体がざわざわして落ち着きがない、発言頻度に偏りがある、発言が進むにつれて元の問いから話題がそれていく、など）が多々記述されており、なおかつそれらへの対応がファシリテーターの心持ちの問題としてではなく具体的な手法とともに説明されている点が非常に参考になる。

第 2 部「実践編」では、30 の物語や思考実験が、その哲学的な背景や子どもたちに投げかけるとよい問い（上述の If を含む問いかけも多く含まれる）、さらに想定される応答やその後の展開の可能性、発展的なアクティビティとともに紹介されている。子どもと哲学をする試みに不慣れな人であっても、本書のどれか一つのセッションを取り上げ、冒頭の物語を読み上げ、それに続く解説や問いかけの例をガイドとしながら対話をしていくだけでも十分に実践が成立するだろう。30 のセッションのなかには「テセウスの船」や「ギュゲスの指輪」などよく知られた思考実験のほか、古典的な物語を

再解釈した短い物語やロボットが主人公のオリジナルらしき一連の物語（邦題の『もし友だちがロボットだったら？』はこれに由来）が含まれているが、いずれにも哲学的に興味深い論点や問いがちりばめられている。そしてどのセッションにも既存の西洋哲学の哲学者やその概念と紐づけたテーマが明示されている点も本書の大きな特徴であろう。

だが正直に言えば、評者が最初に本書を手にしたときには自身の実践で本書を活用するイメージが十分にわいていなかった。というのも自身の実践の主な対象が高校生世代で本書の想定年齢を超えていることもあってテーマや物語が子どもっぽく感じられたし、参加者から募ったテーマや問いについて特に素材などを用いずに考える方式（ハワイ p4c の「プレーンバニラ」形式と言うことも、哲学カフェ形式と言うこともできるだろう）に馴染んでいたからである。だが、試しにと思い、本書を使った実践に参加したり、自分でも使用してみたりしたところ、大きく印象が変わることとなった。

まず本書は小学校などでの使用を主に想定したものだが、対象となる年齢層はその世代に限らないということがよくわかった。少なくともふだん評者が接しているような高校生たちと本書を使っても幼稚な印象を与えることはなかったように思う。むしろ、問いだけがあるふだんの哲学対話とは異なる状況設定や思考実験を大いに楽しんでいたとさえ言える（もちろんセクションにもよるかもしれない。ちなみに評者がこれまで実践したテーマは「椅子」「テセウスの船」「幸せな囚人」「カエルとサソリ」である）。

たとえば実践編の冒頭に配置されている「椅子」

(p. 108)というセッションは部屋の中央に全員が見えるように椅子を置き、「これは何だろう？」という問いかけから始まり、その椅子をめぐるSF的な思考実験が展開するものである。その解説には「哲学をすることで、子どもたちを哲学的なプロセスに引き込むように設計されて」おり、「はじめて哲学を学ぶ子どもたちにとって素晴らしい入門編となる」(p. 109)という説明があるが、実際、小学生や高校生とこのセッションを使った評者の感想もそれと重なるものであり、哲学対話を取り入れる最初の授業でこのセッションを用いることは有力な選択肢になると感じた。

さらに印象的であったのが、高校の先生方による哲学対話の授業をサポートする環境で活用した際である。当該校では月に1回程度のペースで哲学対話を学年全体で取り入れ、評者らが定期的にサポートに入り実践のデザインやファシリテーションの補助を行っている。これまでは素材などは特に用いず教員の進行により哲学対話を行うことが多かったものの、哲学対話に不慣れな先生方にとっては進行上の苦勞が多いことが課題となっていた。そこで本書を活用してみたところ、生徒にとっては思考実験や物語の設定により想像力がかき立てられ話し合いに盛り上がりが見られただけでなく、先生方にとっても対話の道筋が示されており問いかけの例示もあることから非常に取り組みやすかったとの感想をいただいた。この事例同様、国内でも哲学対話の普及につれて、教員本人の希望の有無や哲学対話への習熟度にかかわらず、進行を担わざるをえないケースが現れつつある。そのようなケースでいきなり問いだけを提示し、対話をするのはやはりハードルが高い。そこで本書を活用することで、1回1回の実践への取り組み

みのハードルが下がるだけでなく、「哲学的に考えるとはどのようなことなのか」を教師と生徒がともに手順を追いながら実感とともに学んでいくことができるだろう。

＊

ここまで見てきたように本書は国内の実践者にとっても対話の進め方やファシリテーションのテクニックの面および対話のテーマや素材の面、いずれにおいても実践に向かううえでの豊富な「手札」を与えてくれるという点で大いに意義がある。だが、ここではもう一步踏み込んで、以下に挙げるといような哲学対話をめぐるいくつかの議論についての参照点として本書の役割を考えてみたい。

第一に、進行役養成の文脈でしばしば話題となるファシリテーターに哲学の知識は必要かという問題についてである。本書は哲学的な探究を歴史上の哲学者やその概念と関連づけることに積極的な一方で、必ずしもファシリテーター自身がそれら哲学の知識を十分に有していなくとも（本書を活用すれば）よいという位置付けにあると思われる。すなわち、この問題に対しては本書を経由することで、「哲学対話を進めていくうえで哲学の概念との関連性は重要である、だが必ずしもファシリテーターには十分にその知識がなくとも（本書を活用すれば）かまわない」という解答が可能になるだろう。この立場の是非そのものは別途検討する必要があるが、国内では学校教育においても市井での哲学カフェなどにおいても大学などで哲学を専攻してこなかった実践者も多くいる現状に即しても十分に検討に値する応答となりうるのではないだろうか。

第二に、ハワイスタイルの p4c との異同についてである。国内の学校での哲学対話の実践に広く影響を与えているのは間違いなくハワイ p4c である。「知的なセーフティ」の理念は哲学対話一般の説明と重なりあって広く知られている。また、アカデミアの Big P(hilosophy)と対比した子どもたちの率直な不思議（wonder）に重きを置く little p(hilosophy)を重視する姿勢は、第一の論点とも重なりながら、哲学対話のイメージとして浸透しているようにも思われる。これに対して本書は哲学の知識と紐づけた素材や問いかけを多くふくんでいる点など、ハワイ p4c とは異なる、そして非常に有力な P4wC（Philosophy for/with Children）の方法を示す（むしろ、本書の示す実践像のほうが世界的にはオーソドックスとすら言えるかもしれない）。それゆえ、本書を実践に活用するかどうかとは別に、国内の実践の現状を相対化して捉える助けとなり、別様の実践の可能性を示す点も本書の大きな貢献と言えるだろう。

第三に、道徳教育と哲学対話の関係についてである。現在、国内の小学校での哲学の授業の大部分を担うのは「特別の教科 道徳」である。そこでは到達目標に即したかたちで教科書をもとに教師たちによる豊かな実践がすでに行われており、それらの実践と本書が示す実践編のテーマは重ならないことが多いように思える。むしろ本書は道徳的な価値の教育を主眼とせず、哲学的に考えることに一番のフォーカスを当てているという点からも当然のことではあるが、それゆえに、小学校で教師たちが本書を使用する余地がどの程度あるかについては疑問や課題も残る。だが、哲学的な探究と道徳的な価値の理解や徳の獲得は本来的には非常に親和性が高いもののはずである。だか

からこそ、道徳の教科において哲学対話を行うことと、本書のように道徳的な価値理解などを目的とせず哲学的探究を子どもと行うことにはどのような違いやそれぞれの意義があるのかを本書を手がかりにしながら論じることもまた重要となってくるのではないだろうか。

このように、原書の完成度とは別に国内の哲学対話の近年の動向と関連づけてみることで本書の意義はますます増すと言えるだろう。とはいえ、本書の30の題材はどれも大人が一人で読み進めたとしても興味深く、「もし～」から始まる問いの数々は否応にも思考を揺さぶる魅力をもっていることを最後にもう一度強調しておきたい。教室などでの実践へのハードルが高くても、まずは身近な人と本書を使って対話して、本書を楽しんでほしい。きっと結果として、哲学対話のイメージを再考したり、さらなる可能性を考えたりするきっかけになってくれるはずだ。

小川泰治（宇部工業高等専門学校）